

附属病院ご利用のみなさまへ

●医学部附属病院の財務内容など

医学部附属病院の収益構造を見ると、附属病院収益が約246億円で医学部附属病院の業務収益(約346億円)の約71%を占めており、引き続き、附属病院収入の増収が病院経営における重要な課題となっています。

平成18事業年度においては、患者数が前年度に比べ入院で約2.5%増、外来で約2.3%増えていることなどから、収入が約2.7%増えています。損益としては、約19億円の経常利益が計上されていますが、これは業務収益全体の約5.6%にあたります。

また、受託研究等の外部資金獲得にも力を注いでおり、受託研究等収益は約1億4千万円増となっています。

年度当初の医薬品及び診療材料(たな卸対象品)は約5億6千万円でしたが、期末においては約4億9千万円と約7千万円を削減しており、医薬品及び診療材料の管理の効率化を図りました。また病院収益に対する比率は約2.0%となっています。

●平成18年度の取り組み

■患者アメニティの改善等

医学部附属病院では、患者サービスの観点から患者アメニティの改善等に積極的に取り組んでいます。

平成18事業年度では、入院環境等の改善のため、コンビニエンスストアを新たに設置しました。また、健康増進法の施行も踏まえ敷地内全面禁煙にも取り組んでいます。

また、医学部附属病院における看護の取り組みを通して、高度医療の提供内容を広く市民に知って戴くため、「看護フェア」を実施し、平成19事業年度からは、さらに他の部門も参加し、「オープンホスピタル」として取り組んでいます。

■先進医療及び社会貢献の推進

医学部附属病院では、標準的な治療の施行のみでなく、先進医療の推進も重要な使命であり、新たな治療法の開発に向けて探索医療センター^{*1}が中心となり、たとえ採算が見込めなくても新規治療の開発に多大な研究資源を投入しています。

先進医療の推進として、「医師主導の新薬治験^{*2}」・「臍島移植^{*3}」に取り組んでおり、治療法の確立した「肝・肺

附属病院収入

(単位:百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	増減率
附属病院収入	22,778	23,886	24,519	2.7%

患者数

(単位:人)

区分	16年度	17年度	18年度	増減率
入院	364,929	361,860	371,061	2.5%
外来	582,594	597,553	611,335	2.3%
計	947,523	959,413	982,396	2.4%

※上記患者数は本院と保健診療所を合わせたものです。

附属病院セグメント情報

(単位:百万円)

区分	金額
教育経費	19
研究経費	1,025
診療経費	16,811
受託研究費	1,087
受託事業費	35
人件費	12,144
一般管理費	289
財務費用	1,274
雑損	0
業務費用(計)	32,684
運営費交付金収益	7,085
附属病院収益	24,576
受託研究等収益	1,060
受託事業等収益	35
寄附金収益	854
その他	1,016
業務収益(計)	34,626
業務損益	1,942

医薬品及び診療材料比率

2.0%

= 医薬品及び診療材料(493百万円)

／附属病院収益(24,576百万円)

移植」・「強度変調放射線治療^{※4}」等については、先進医療として実施しています。

また、医師や医療従事者の卒後研修にも力を注ぎ、将来の日本の医療レベル向上^{※5}に尽力しています。

さらには、がんセンターを設置し、高度ながん医療の提供を行っています。

これらの先端医療を行う基盤整備の一つとして、世界最高水準の定位放射線がん治療装置「ノバリス」^{※6}を導入し、平成19年2月から多くの患者さんに対する治療を行っています。また、新病棟^{※7}の新営を進めています。

- ※1 院内に設置されている「探索医療センター」においては、全国の拠点的なセンターとして、基礎研究成果を用いた新医療の開発を推進しています。
- ※2 新薬の治験は企業主導でありましたが、平成15年の薬事法改正により医師主導の治験が可能となりました。
- ※3 点滴により行う膵島移植は、開腹手術による膵臓移植に比べ、患者さんの体への負担が少ないものです。
- ※4 放射線量の強弱を調整することにより正常組織への被曝を軽減、病変部だけに高線量を照射する治療法です。
- ※5 医師等の養成に関しましては、医学研究科・医学部を中心とする卒前教育に加え、院内に設置されている「総合臨床教育・研修センター」が中心となり、医師、薬剤師、看護師、コメディカル等の卒後教育を推進し、医師等の養成に努めています。
- ※6 定位放射線がん治療装置「ノバリス」(全国に10台しか導入されておらず、国立大学病院では、本院のみです。)は、頭部・頸部だけでなく、脊椎や肺、肝臓、前立腺等の体幹部への治療にも適用可能な定位放射線がん治療装置で、特に早期肺がんに対する新しい治療法として急速に普及しています。
- ※7 先進医療の推進に向けての新病棟建設を計画中です。(寄附により、がんを中心とした先進医療病棟の建設を進めています。)

●寄附による新病棟の建設

山内溥氏(任天堂株式会社相談役)から70億円のご寄附を受け、医学部附属病院の新病棟の建設を進めています。医学部附属病院の病棟を寄附により建設することは、国立大学法人にとって初めてのことです。

医学部附属病院は平成11年に外来診療棟が新設されましたが、病棟に関しては一部老朽化や分散という問題があり、新病棟の整備とともに病棟の一元化を図る構想を検討していました。

この度、山内溥氏からのご寄附を受けて建設する新病棟は、この構想実現の第一歩として患者アメニティを重視した高度先進医療・最先端医療を実践するための適切な環境を提供するものであり、がんを中心とした先進医療病棟として、平成22年1月の開院を目指しています。

高度な移植医療

(単位:件)

区分	16年度	17年度	18年度	これまでの実績
膵島移植	12	5	3	20
肝移植	101	78	77	1,252
肺移植	3	1	0	8

先進医療(高度先進医療)

(単位:件)

区分	16年度	17年度	18年度
インプラント義歯	1	2	2
腹腔鏡下前立腺摘出手術	5	6	平成18年4月から保険適用
脳死肺移植	—	1	平成18年4月から保険適用
強度変調放射線治療	—	—	54



膵島移植手術の様子



定位放射線がん治療装置「ノバリス」



新病棟(完成イメージ)